仏教企画通信
63号
発行日｜令和3年3月1日

発行所｜有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax.042-782-5117
発行人｜有限会社 仏教企画代表　藤木隆宣
Email｜fujiki@water.ocn.ne.jp

「研究」について思うこと

駒澤大学名誉教授
佐々木宏幹

研究とは何か

大学に在職していた頃、はじめて会った人からよく「何を研究しておられますか」とか「専攻（専門）領域は何ですか」などと問われることがあった。

前者と後者とは意味の上でほぼ同じと言ってよいだろうが、後者の方がより具体的かつ専門的であると言えようか。

私は「何を研究しているか」という問いには「人類学」と答え、「専攻（専門）領域は何ですか」という問いにたいしては「文化人類学または社会人類学」と答え、さらに細かい問いには「宗教人類学」と答えることにしていた。

人によってはさらに踏みこんで「人類学ってどういう学問ですか」と訊いてくる。この問いに「人間とは何かを研究する学問です」と答えたとする。さあ大変である。「人間とは何かを研究する」と述べた途端に、研究の範囲は限りなく拡大するからである。動物学、生物学、医学、生理学、遺伝学から人類学、歴史学、心理学、宗教学、倫理学、人間学、哲学等々、思いつくままに列挙しただけでも大変な数になるだろう。古くから「文系」と「理系」という分類があったが、今日（こんにち）では細分化が急速に進み、既成の枠にはとても収まらないものもあるらしい。

恐縮にも感じるが、私の場合を例に挙げてみよう。既述のように私は「文化人類学」とか「社会人類学」と呼ばれる、一九五〇年頃にはまだ斬新な響きをもつ学問を専攻することとなった。大学では将来の就職のことも考えて、潰しが効くように感じた英語・英文学科に入学し、卒業論文はW・シェイクスピアの悲劇「マクベス」について論じた。有名なこの作品は総じて内容が無常観的なものを秘めていると感じたからである。

シェイクスピアの日本語訳はいろいろ出ていたが、私の気に入った訳は、坪内逍遥（つぼうちしょうよう）のそれであった。

ことに、猛将として知られたマクベスが敵方に敗れ、最後に吐いた言葉である。訳文はこうである。「消えろ　消えろ　束の間の灯火（ともしび）　人生は畢竟（ひっきょう）　歩いている影たるにすぎぬ

ただ舞台の上で　ぎっくりばったりをやって　やがては　噂もされなくなる　みじめな　俳優だ　馬鹿が話す話だ」。

逍遥の後にいろいろな人が訳しているが、好みにもよろうが、右のような格調高い訳文を私は知らない。

大学の卒業論文でシェイクスピアの「マクベス」を扱った私が、どうして文化人類学（社会人類学）を専攻するようになったのか。

いま考えるときわめて偶然としか言いようのない動機によるものであった。

人類学に辿りつくまでには実にいろいろなことがわが身に生じたが、そのことについては省略する。

大学院で何を「研究」しようか迷っていたときに、同級生で親しくしていたH君が語りかけてきた。彼は歴史学科で日本史を学んでいたが、満足していなかったようで、大学院では別の学科を狙っていたようだ。

その彼曰（いわ）く「東京都立大学に社会人類学専攻というのがある。面白そうだから受験してみようと思う。一緒に受けてみないか」と。

「人類学」という名は知っていたが、この名で連想するのは「未開社会」、「アフリカ」、「ネアンデルタール」、「裸体」などであり、「文化・文明人」とは確然（かくぜん）と区別された人間であった。

「これからの研究領域だよ」とH君は付け加えた。

たしかに当時人類学を専攻できるのは、東京大学と東京都立大学が主たる研究機関であった。将来の方向性が定まっていなかった私は、駄目で元々の気分でH君と一緒に受験した。それが何と、H君は落ち、私が合格したのである。受験科目は論文と語学で、語学は英・独・仏とインドネシア語であった。どうしてインドネシア語がと訝（いぶか）しむ人もいるだろうが、ここでは触れない。

私が合格できたのは、多分英語が比較的よかったのと、「宗教」を中心に研究したいと述べたからであろう。私に面接した教授は、「宗教か。実はこの四月から宗教社会学の大物教授がこの大学に来ますよ」と口にされた。「漏らされた」と言った方が適切だろうか。その大物教授とは、古野清人先生であった。古野先生はフランス語が得意な方で、東大の宗教学・宗教史学科に学ばれたが、院生のときにフランスの社会学者、E・デュルケムの有名な『宗教生活の原初形態』（岩波文庫）を翻訳されていた。

ちなみに学生時代にすでに売れっ子であった山口昌男氏は一年先輩であった。山口氏は多読家であり、何を話しても知らないこと（もの）はなかった。彼は学部は東大であったが都立大では古野先生に師事した。

古野先生の御自宅は、自由ケ丘（東京都目黒区）の隣の九品仏（ぐほんぶつ）（東京都世田谷区にある浄土宗浄真寺の通称にして、同寺周辺の地区名）にあった。駒澤とも近かったので、しょっちゅうお訪ねした。話好きの方で、私を相手に話しだすと、御自分の意見を述べてから、「君どう思うかね」と振ってくることが多かった。また博多の珍しい海産物が手に入ると、「君夕飯を食べに来ないか」と電話があり、よく御馳走になった。

神奈川県相模原市緑区　日庭寺内　佐々木宏幹文庫

古野先生は学生にたいして、「修士論文は他人の論文に拠って書き、博士論文は自分自身の調査に基づいて創るといい」とよく言われた。

この言葉には、人類学の「研究」とはいかなるものかが強く示唆されていたと思う。文献研究と（実地）調査とである。

概して文献研究は文系・理系を問わず、およそ学問研究であれば不可欠の手段・方法であるが、自ら現地に赴いて調査することがなくても可能である。

しかし人類学や民族学・民俗学にあっては研究者が当該地域や社会に行かずに済むことは少なくとも現代においてはありえないと言えよう。

とは言えこれは主に文献を手掛りに研究する人には（実地）調査が不必要であるということではない。小説家として勝れた作品を数多く残された司馬遼太郎氏などは、現地調査にも大変熱心であったようである。

先に述べた古野清人氏は文献にも強かったが、調査の方は「隠れキリシタン」研究で学士院賞を授かり、学士院会員にもなられた。九州大において時の仕事が評価されたのである。

調査研究あれこれ

私は数多くの調査研究を経験したが、それには自分一人で行う個人調査と、同僚と一緒に出かける共同調査とがあった。調査費は自費の場合と文部科学省の科学研究費に拠るものとがあった。国からの補助は「科研費」と呼んでいた。科研費は旅費と調査費併せると、約三千万円程戴いていると思う。国にたいして「お蔭様で」と言うべきであろう。

私がはじめて科研費による海外調査を行ったのは、一九七七年八月から十月にかけてであり、調査地はシンガポール国であった。

団長は東大名誉教授の窪徳忠氏であり、団員は直江廣治氏（筑波大）、鎌田茂雄氏（東京大）、野口武徳氏（成城大）、可児弘明氏（慶応大）、および私（駒沢大）の総勢六名であった。

窪先生がどうしてシンガポールを調査地とされたか。東大時代の窪氏は文献による道教の研究をされていた。本来なら中国本土に行くべきであったろうが、それは当時としては無理であった。ならば中国人（華人）が大部分を占めるシンガポール国にしようと判断されたようである。

窪先生は親分肌の人で常に大声で喋るので、他人が聞いたら喧嘩をしていると思われるほどであった。

私はそれまで日本の東北地方のイタコやゴミソ、沖縄・奄美のユタなど「シャーマン」と呼ばれる宗教者を調査・研究し、論文も書いていたが、それを知っている窪先生は、華人社会のシャーマンである「タンキー」（童乩）とか「キートン」（乩童）について調査・研究するように私に嘱望された。私は「よしきた」と思ったが、タンキーを見つけるのが大変であった。そのことをホテルの受付の女性に話したら「素晴らしいタンキーを知っているので紹介しよう」というので、早速その夜、女性タンキーのジュディ・キョンさんの降霊会（セアンス＝seance）に連れていってもらった。私は幸運であった。ジュディ・キョンが協力的であったのと、その娘で高校生のセリーナが私の仕事に興味をもち、他所のタンキーを何人も紹介してくれたからである。

そのおかげで私は苦労せずに十名以上のタンキーを調査することができたばかりか、セリーナが通訳をしてくれたのである。

シンガポール人の多くは中国福建省からの来住者で福建語を使用するが、セリーナはそれを分かりやすい英語で語ってくれた。ちなみに彼女の母校は名門のラッフルズ・ガールズ・スクールであった。

タンキーのセアンスとはどういうものか、「研究」者の視点から述べてみよう。

まずジュディ・キョンはシンガポールでは知らぬ人がいないほど有名な霊能者であるということ。なぜそれほど有名なのか。第一に彼女の語ることが「よく当たる」ということ。依頼者の多くは病いをもつ人であるが、彼女はその病状を詳しく聞いてから、自分の守護神である感天上帝に病状を告げ答えを求める。数分すると彼女の身体が激しく震えだし、いわゆるシャーマンのトランス状態（神がかり）に落ち入り、予言・託宣する声は男性のそれに変化する。感天上帝は道教の式神であるという。

その激しさに依頼者もガタガタ震えだすことがあった。神と依頼者との遣り取りは、すべて録音することができた。すべてセリーナ嬢のおかげである。私は、被調査者の家族に家族扱いされていたが、これは大変な僥倖としか言いようがない。神への質問のなかには家族にも秘めているような問題もある。私はそれをもテープに採ることができたのである。一見冷酷であるような気もするが、宗教の深いところを明らかにするためには欠かせない方法であると考えている。宗教「研究」にはこうしたむごい方法も付き纏っているのではなかろうか。

人間の「研究」にはきわめて数多くの分野・領域があるが、人類学における人間研究は、夢とロマンに満ちた手段や方法だけではとても済まない。

私が調査の現場で撮った写真を学会発表でもよく使用したが、その際「よくこんな場面が撮れたものだ」と感心する研究者がいて、理由を訊かれることがあった。「相手と仲よくなること」と答えることが多かったが、「仲よくなる」なり方はさまざまであり、「人による」とでも言うしかあるまい。

先に述べたセリーナ嬢は、私がドキドキ・ハラハラするような行動をとってくれた。

彼女の母が依頼者の深刻な問題に答えているとき、私が持参した小型のカセット・テープを母の前机の上に置いて、母が言ったことをすべて録音してくれたのである。

その中には肺癌を患っていた女性にたいしてタンキーのジュディ・キョンが「いま通院している病院が悪い。病院を変えないと駄目だ。私が良い病院に連れていこう」と述べたくだりもあった。ジュディは若い頃にシンガポール市内の大病院で看護師をしていたことがある。彼女の評判がいい理由の一つであろう。ちなみに肺癌を病んでいた女性は助かったという。

このように私の「研究」はまさしく「人間研究」であるが、その特色を挙げるとすれば、相手との関係を深めること、相手から信頼されることにあったと思う。これはマレーシアやフィリピンにおいても同じであった。

研究者、ことに人間相手の研究者は、「研究者面」を絶対してはならない。

俺はお前（たち）を研究し、調査しているのだという態度を執った途端、その調査は失敗であると言えよう。とくに信仰と重なる宗教儀礼の研究においておやである。

『広辞苑』（岩波書店）では「研究」とは「よく調べ考えて真理をきわめること」とある。また「真理」は、①「ほんとうのこと。まことの道理。」とあり、②〈哲〉〈truth（トゥルース）英語、Wahrheit（ヴァールハイト）ドイツ語〉④絶対的存在または実在的関係・事態を言い表している判断の客観的妥当性。従って単なる概念は真でも偽でもなく、それが判断により肯定または否定された時にだけ真理・虚偽が云々される…」などとある。

私の宗教人類学的「研究」などは哲学的にはどのように説明されるのであろうか。

なおセリーナの父母はすでに亡くなり、彼女は日本人と結婚し、今ハワイのホノルルに住んでいる。

新連載

『参同契・宝鏡三昧』に学ぶ 1

千葉県柏市 龍泉院東堂
椎名宏雄

一、はじめに

お恥かしいことながら、筆者が『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』一巻を大法輪閣から上梓したのは、二〇一九年九月であった。どれほどの宗門の方々に読んでいただけたか分からないが、若干の反響はさまざまなルートを通じて筆者の耳にも届いている。いわく、「やさしく」といいながらむつかしいではないか。いわく、前文の漢詩の歴史は役に立った。いわく、禅門偈頌はおもしろかった。いわく、偈頌の解説を通じて中国禅宗史の勉強になった。いわく、両書についての解説書が身近にないので便利だ。などなど。

ほぼ在家の方々なのであるが、勉強になるのは著者のほうである。概して好意的なご意見が多いのはありがたいが、最初の言のような辛口のご意見には、筆者も思いあたるフシがある。何といっても、両書は筆者にとっても難解だからである。じつは、この書を書くために私は解説書のみならず、古伝の末書（原本を祖述した本）なども少なからず拝見したのであるが、見るほどに読むほどにわからなくなり、ついにはあまり古伝の末書にはよらず、自分の貧弱なレベルだけでゆこうと意を決した。つまり、悪くいえば私観私釈で書き進めてきたのである。だから、独断的な部分も少なからずあり、誤解も多いのであろう。それでも一応は全文の逐語訳を根底にすえ、在俗の一般人の方々にも全文のご理解ができるように、との思いで執筆したのが、『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』（以下、前著）の正体であった。

ところがこのたび、企らずも本紙の編集者から、前著とは異なり、宗門のご住職方向きに執筆を、との依頼を受けてしまった。より難解にとの意味ではない。そこで老耄の頭をかかえて愚考したところ、編集者の需めは従来から多くなされている語釈などではなく、『参・宝』両書の持つ要素や影響や問題点などを広く掘り起こして説明をくわえることと受けとめたのである。

具体的に申せば、①両書はなぜ結びついているのか、②なぜ両書は中国ではあまり読まれず、日本のしかも曹洞宗でのみ盛行したのか。③両書はいつごろ日本に将来されたのか。④『参同契』はなぜ同名の道教文献と同じタイトルなのか。⑤『宝鏡三昧』の撰者に異説があるのはなぜか。⑥また『宝鏡三昧歌』とするものがあるが、真の名称はなにか。⑦両書は洞門でなぜ五位や易の思想と一諸に扱われるのか。⑧両書の成立は九〇年ほども隔たっているが、はたして『宝鏡三昧』は『参同契』を参照しているのかどうか。などなど、さまざまな問題がある。まだそのほかにもあるであろう。考えてみれば右の事柄だけでも、両書を重要視している洞門にとっては、たしかに看過できない点である。それどころか、論文のテーマとして考究すべき事柄である。『宝鏡三昧』のほうが沢山の問題を抱えていることにも注意せられる。

ともあれ、右に挙げつらねた諸問題からでも、この両書は曹洞宗門の宗旨にもかかわる重要な典籍であることは認識されるであろう。すると私などの手には余るものではあるが、せめて以下その外面的・皮相的方面だけでも考究してみたいと思う。

二、『参同契・宝鏡三昧』の研究文献について

私は前著末尾の付録で、両書の注釈書（比較的閲覧可能なもの）として一六種の文献名を列挙しておいた（一八四～一八五頁）。一六種といっても、「曹洞宗全書」や「続曹洞宗全書」に収録される古注類九種が含まれるから、かならずしも誰もが図書館などで簡単に閲覧できるばかりの書ではない。残る七種の単行書とて同様である。

ただ単行書は単なる両書の語釈や文意解説だけではなく、両書について前掲したような諸点の考究的言及もあるから、まずは必読の参考文献である。ところが、今日的な学術レベルからみて価値ある文献ということになると、保坂玉泉・鏡島元隆・柳田聖山という三者の注釈書にすぎない。さらにこの中で鏡島氏の注釈に付けられた解説は、実は柳田氏であるから、保坂・柳田両氏の解説にしぼられてしまう。

駒大の学長であった保坂玉泉氏の為人については多言を要しないが、当面の両書について評するものを知らないので、あえて紹介しておこう。

まず保坂氏は『参・宝』について、『参』は這箇一心と大仙の心と詮顕し、『宝』は其一法を如是の法と呈露して、前来の一心一法を各分析し統一し拡充し止揚すべく『倶舎』『唯識』『般若』中観の論理と中国儒道周易とを巧みに交絡し、『法華』『涅槃』の荘美なる文芸説話譬喩と秦漢の故事とを経緯に織り成して古錦さながらの絵巻ものを展開し高潔なる禅教を簡易に闡明した。」（前掲書、序）とのべている。

このように、両書の特質を端的に叙述するにとどまらず、両書の説明の項では、両書の文体は、倶に七虞七遇の韻を交用した禅文学の白眉であると評し、特に『宝』は『参』に和韻した可能性を指摘し、要するに両者は文体主旨ともに姉妹篇をなす秀作偈頌、と讃揚している。保坂氏は宗門の重鎮であり、また倶舎・唯識・因明などの教学に長じた学僧であったから、その立場にふさわしい所説であるといえよう。

次に柳田氏の所説をみよう。柳田聖山氏といえば、いうまでもなく戦後における中国禅宗史研究の泰斗であり、わが国の仏教学者の至宝ともいえ

る存在であった。その柳田氏による『参・宝』についての解説や論攷は少なくないが、まず筑摩書房の「世界古典文学全集」第三六巻Bの『禅家語録Ⅱ』の中でほどこした各禅籍に対する解題が適切である。そのほか、最も学術的に高度であり、今後も斯学から注目され続けられるべきものとしては、「禅の文化」―資料篇『禅林僧宝伝』訳注（一）（昭和六十三年、京都大学人文科学研究所）の巻一「撫州曹山本寂禅師」の語注に出てくる「宝鏡三昧」についての大論文（研究）である。すなわち、この大論文は、『宝』に対する詳細極まりない語注や現代語訳をはじめとして、該書の作者、初出テキスト、該書のコメントや引用などについて、およそ可能なかぎり検討・考究をされた成果が網羅されているのだ。この柳田氏の大論文以前に、原本『禅林僧宝伝』（一一二三）そのものが、ほとんど未研究であったナウな資料であるだけに、氏の研究は『宝』の研究にとっても完全に一時期を画するものである。氏の所説の一々については、また改めて逐次紹介してゆきたい。

以上、両氏の研究文献について簡単に紹介してきたが、ここで私は重要な他の文献一点を見落としていたことを告白しなければならない。その一点とは、石井修道先生の『石頭』（二〇一三年、京都、臨川書店）である。その第四章第一節『参同契』は、けっしてありきたりの語釈や註解ではない。

この論攷は、まず『参・宝』が宗門で毎朝読誦されるのは指月慧印の『参同契不能語』（一七三六成立）以後の定着であろうと言及し、また魏伯陽の『周易参同契』の内容と石頭『参同契』との内容対比をなし、さらに法眼文益の石頭理解を説明し、石頭『参同契』の成立背景、同じく斬新な本文訓読と現代語訳を行ない、さらに『参同契』の影響で成立したという洞山の『心丹訳』一篇の訓読と現代語訳なども紹介されているのである。まさに前記の先学もなしえなかった卓論超説であり、これの見落としは、私にとって慙愧以外の何物でもない。さきに並記した問題点の多くは、すでに論及され、しかもそれを凌駕さえしているのだ。

さらにいえば、この『石頭』一冊は、単に石頭の伝記や思想のみを解説するにとどまらず、唐代の初期禅宗史の上に、石頭禅という一派が活動した特色が、いかにして生まれ展開し、やがて洞山良价によって花開くかを知らしめる核心に迫った空前の名著であり、洞門人にとっては必読の名著であるといってよい。だから、私がいたずらに『参同契』のみに目をとられて、本書を見落としたのは千慮の一失どころか、千慮の千失であった。ここに石井氏にのみならず広く江湖の諸大徳方にたいして、筆者は大懺謝をしなければならない。

ところで、石井氏は右の卓論中、古注およびその撰者たちの言説をも、重要なものは漏らさず引用や紹介をしている。つまり、我々の大先輩方の中には、前掲の問題意識を十分に弁えて参究考察した先覚者・学究者たちが立派に存在していたのであり、ありがたいことである。そこで次号には、そうした方面の紹介をしてみよう。

以下次号

椎名宏雄（しいな こうゆう）
龍泉院（千葉県柏市）前住職。駒澤大学大学院博士課程満期退学後、曹洞宗宗学研究所研究員、曹洞宗文化財調査委員、柏市文化財保護委員会会長、駒澤大学大学院非常勤講師等を兼務しながら一九五八年より龍泉院住職。『宋元版禅籍の研究』（大東出版社）、『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』（大法輪閣）、『沼南町の宗教文化誌』（たけしま出版）など著書・共著ともに多数。

座談会

いまお寺・僧侶に求められているものは何か

コロナ禍での煩悶と有馬実成師遷化二十年に考える

石澤良昭（元上智大学学長）
有馬嘉男（NHK報道局キャスター）
三部義道（シャンティ国際ボランティア会副会長）

司会｜藤木隆宣

コロナ禍を経験して仏教のお葬式のあり方を検証していく必要があると思います

藤木　新型コロナウイルスの感染対策によって、日常生活はもちろん、実に多方面への影響が出ています。毎年ノロウィルスやインフルエンザウィルスの感染時期を過ごしている私たちも、いわゆる「3密回避」や「ソーシャルディスタンス」といったところにまでは思いが及ばない生活をしてきました。いま、実際にお寺での活動、あるいは法務全般を通じてお感じになることをお聞かせください。

三部　コロナ禍になってからまず実感した変化は、お寺ではなくて火葬場や葬儀場のほうから規制がかかってきたことでした。火葬場に入れる人数が十人までですとか。そうすると、その流れで葬儀場に集まる人数も制限されてきます。会葬したい方がいらっしゃっても玄関の外で焼香だけしてお帰りくださいというようになりました。さらには言えば、葬儀が始まる前の段階、つまり人の移動を制限したほうがよいとの観点から、親の葬儀にお子さんや兄弟姉妹が来られなかったりということになっている葬儀が本当に続いています。人が亡くなって感じるこころの痛みのほかに、お別れすらできないという痛みも多くの方が感じていますね。

家族じゃなくても会葬に行きたい、お別れの言葉をかけたい方はたくさんいるにも関わらず、それができないということで、きちんと納得したお別れができないわけです。葬式というのは単なるお別れの儀式ではなくて、心を整理して落ち着けていくイニシエーションだと思うのですが、それができない苦しみを、いま多くの方が抱えているんじゃないかなと思います。

有馬　それは大きいですね。しかも最期のお別れをする機会を失ってしまうわけですよね。

三部　ですから葬儀の後にお話しすることは、「ここに来たくても来られなかった方がたくさんいらっしゃるでしょう。その方もそれぞれの場所でこころをこめてご冥福を祈ってくれているに違いない」ということです。ただしそれが救いになっているかどうかは全く分かりません。

藤木　私も幾つかお葬式を務めさせて頂きました。人数も含めていろいろな制限を実感するのですが、それに加えて葬儀屋さんによっては非常に簡素化を進めています。一日葬でお葬儀だけしましょうというようなことを施主の方にお勧めするケースもあるようなのです。私はそこに対しては疑問を抱くのです。死者を送る儀礼を何でも簡素化すればよいというものではないはずです。ですからお通夜からきちんとやりましょうということを住職から言うと、施主家は理解なさって聞いてくださいましたので、お通夜、お葬儀の形で務めました。やはりきちんとお見送りをしたということで、施主家が納得する、皆さんが十分お送りできたというお気持ちになることは、住職、そして施主との感応道交ではないかなと思います。

三部　葬式を簡単にしたいというような流れは、コロナ禍以前から確かにありました。だから、人数も少なくして家族葬でします、身内だけで済ませましたというような流れがそれまでにもあったのが、「コロナウイルス感染防止のため」が既成事実みたいになってしまっています。今後も大きく葬儀の形が変わってきてしまうだろうなとは予測しています。元のようにみんなでお送りする葬式の形態に戻していけるのか、少し心配に感じています。　今のような状態が長くなればなるほど、もうこれでいい、こういうものなんだと認識されてしまうのではないかなと。

藤木　これからはコロナ禍を経験して、仏教のお葬式のあり方というものをきちんと検証していく必要はあると思います。家族葬は家族葬でそこにも良さがあります。ただし、その中身を考えなければ。お葬式の簡素化というより、人のこころをきちんとお葬式の形にしていく意味を考えていくことがとても大事だと思います。

石澤　感染が広がるから駄目ですよなんていうことを役所の側は言うでしょうし、提案内容が社会的になかなか認められないかもしれないジレンマはお感じになるかもしれませんが、私はやはりお寺さんが、日本の長年にわたる社会習慣からイニシアティブをお取りになって、様々な提案をしていくことも大切だと思います。本山からいろいろなサジェスチョン（提案・助言）はあるのですか。

三部　今のところ、曹洞宗、教団から、コロナ禍での葬儀はこうしなさいというようなものはありませんが、いろいろ考えているお坊さんは全国にいらっしゃいます。今の状況下でも何ができないかという思いで活動されているお坊さんたちは確かにいます。ただ手をこまねいているだけでなくて、何かしたい。しなければならないだろうと。

お寺・僧侶がどれだけ危機意識を持っているか

三部　コロナ禍の以前も現在も、要はお寺・僧侶の側にどれだけ危機意識があるかだと思います。厳しい言い方になると思いますが、私は、社会がお坊さんやお寺に対して抱っている期待度がどんどん下がってきていると思っています。そのことを危機として感じているかどうかが問われているのではないでしょうか。今こそ仏教も含めて、宗教的な拠りどころが求められているのに、それに応えようとする危機感が足りないと思っています。

藤木　それと、どう動いていいか分からないというところもあるかもしれません。誰かが示していくことも大事かなと思います。

有馬　いま誰しもが、拠りどころになる言葉や声を探してらっしゃると、私も報道に携わる立場として感じています。もう少し具体的に申しますと、番組を通じてお伝えしていると反応があるのです。辛口のお叱りもたくさんいただきますけれども、山極先生（山極寿一・京都大学前学長）のインタビュー良かった、作家の多和田葉子さんのインタビューが良かった、これはという方のインタビューをもっと聴きたいという反応はすごくたくさんいただきました。何かヒントをみんな求めているんだなと感じます。言葉の力をですね。そういう意味で、僧侶の皆さんはどんな声を周りに向けて掛けてらっしゃるのか、お聞きしたいところです。

藤木　コロナ禍の今ですから、ズームですとか、オンラインを活用しての活動は盛んに行われてきていると感じていますがいかがでしょう。

三部　今、オンライン坐禅会というのがあるんですよ。言わばリモートで行なう坐禅会です。実際に座っている姿を、画面を通じて見ながら、もう少しこうしてください、こうしたほうがいいですよという指導をしながら一緒に座りましょうというライブの坐禅会ですね。

有馬　それはお寺さんがやってらっしゃるんですか。

三部　そうです。青年会のみなさんが。若い僧侶を中心に行っています。他にもオンライン説法や、オンライン法事、オンライン読経といったものもあります。坐禅に関して言うと、まず自分が体験者として坐るわけで、お寺まで行って坐るのはちょっと敷居が高いけれど、自宅にいながらオンラインでできるのならやってみようかなという方々がいらっしゃるんだろうと思います。

有馬　ニーズがありそうだなと感じます。

藤木　学校教育の場でも、オンラインになって不登校の生徒さんが授業に出席するようになったという例をニュースで拝見したことがあります。普段はお寺に対しても腰が重かったり足が向かない方でも、自宅のパソコンを通じてご縁を持てるのですから、オンラインのメリットが活かされていると言えるのではないでしょうか。

三部　恐らくニーズがあるのだろうなと思います。他にも、一つのモデルケースとして、東日本大震災の後に「カフェ・デ・モンク」という、いわゆる傾聴活動が大きな運動になりました。

これは、お坊さんを意味する英単語「Monk（モンク）」と、お坊さんに「文句」を言うことの両方を兼ねて。（笑）さらにお坊さんはそれを聞いて悶苦するという掛け言葉になっています。お茶を飲みながら、とにかくお話を聞くというような動きが東日本大震災の現場で生まれて、カフェ・デ・モンクという形態が各地の被災現場の中に、例えば熊本だとか、北海道だとかに広がって、今一つの形になっています。

有馬　面白いですね。カフェ・デ・モンク。

三部　そこから派生して、「臨床宗教師」の養成教育が東北大学で始まりました。カフェ・デ・モンクの運動がきっかけです。

有馬　そうなんですか。それがきっかけなんですね。

藤木　これは大学で学んで、それから本山に行ってということだけではお坊さんは務まらないという問題意識があって、いろいろな勉強を世間に広く求めていこうという動きなんだろうと私は考えています。

そこから考えますと、やはり有馬実成先生は本当に先駆者ですね。今から、本当に考えなければいけないことがもう分かっていらっしゃって、動いておられたんだと思います。

有馬実成師が提唱していた国際化への思い

三部　有馬師が生前おっしゃっていたことで鮮明に記憶に残っているのは、「国際化というのは頭だけで考えて格好を整えてやってたって駄目なんだ。田舎のお父ちゃんが農作業の帰り、鍬を抱えて土手に座って一服しながら、『ところであの難民問題どう思うよ？』という感じにならないと、日本が国際化したとは言えないんだ」という言葉です。「そういうことを地域に行きわたらせるような活動ができるのはわれわれお坊さんだ、だからやっていかなきゃならない」というようなことを熱く語ってらっしゃいました。

藤木　なるほどね。大勢のところで演説を聞いてもらって事足りるではなくて、もう少し小さな集まりの中で雑談しながらとか、生活に密着した形で行なっていくことが大切だというようなことなんでしょうね。

石澤　人数的には少人数やまたは一人ずつという面も出てくると思います。

有馬　三部さんや父が考えた日本人の地域の国際化はどのくらい実現しているでしょうか。あるいはどのくらいそこに近づいているでしょうか。外国人の隣人たちに、日本人はどのくらい俯瞰して理解するというリテラシー（正しく理解し表現・活用すること）ができ上がっているのかなと思うと、父が他界して二十年経って、日本は変わったのかなというふうに思うことも多いです。

三部　そこなんですよ。忸怩たる思いがあります。もしかしたら、むしろ逆行してるんじゃないかなと思うこともあります。ナショナリズムみたいなものがどんどん強くなるような感じがあって、その裏返しといいますか、外国人に対しては非常に冷たくなっているような感じが私はします。海外の方たちがどんどん日本

に入ってきている中で、受け入れる側として、日本人が真にやさしく接しているかというと、果たしてどうなんだろうかと思うのです。犯罪を犯す外国人もいるわけですが、一人がそうなると全員の外国人に対して差別意識と同じような感じで見てしまっているのではないかなと。

藤木　有馬さんにとっては、お父さんはどういうふうに見えましたか。お聞きしたところによると小学生の頃にアフガニスタンに連れて行かれたと。

有馬　そうです。カイバル峠にも行きました。今はもうなかなか行けない地域ですね。あとアフガニスタンのパーミヤンの遺跡を一緒に見に行ったり。幸せでした。でも、父はボランティア会については必死でした。そこは子どもながらによく覚えています。これでは身体がもたないなとも思いましたし。ただ、父のいろいろな表情は思い出すのですが、悲壮感や必死さというよりも、とても楽しそうではありました。山口県と東京の事務所と外国も含めて動き回っていましたから、実は父の言葉もしっかり覚えてはいないところが多いのです。そんな中、数少ないやり取りで鮮明に覚えてるのは、「そんなに動いていていしんどくないか」と聞いたときに、「いや、動いてるのが楽しいんだ」と。「移動しているのが楽しいし、物事が動いてる中に自分がいる、自分が動いてるのが楽しいんだ」と言ったのを強く覚えています。「あ、そうか、動くって楽しいんだ」っていうふうに、「動く」と「楽しい」の単語が結び付くのが印象的でしたね。人と話をしたり、人と交わったりということも含めて、常に動いているということが面白いんだなというふうに思い、それはその後、私も刺激を受けたんだと思い返す言葉の一つです。

藤木　有馬師は本当に熱いスピリットをお持ちの方でした。今の言葉を聞きましても、今の、そしてこれからの僧侶たちにぜひ胸に刻んでほしい言葉だと思います。

石澤先生は、有馬実成老師とはどういったことでのつながりが多かったのでしょうか。

石澤　私は同じカンボジアでもシェムリアップという地方での活動が中心で、有馬さん方は首都のプノンペンを中心にしながらボランティアをやっておられました。お互いに日本とカンボジアを行き来していて、私も日本への飛行機に乗るには一度プノンペンに出て、更にベトナムのホーチミンを経由しなければいけません。そこでお父さんの実成師とご一緒して、もう何十回ですか、お互いの情報交換をさせていただきました。SVAがやっておられる仕事というのは非常に大きいですし、カンボジアの一般の方々にも還元されるお仕事でした。

試行錯誤を繰り返しながら仏教を伝えていく努力を

藤木　東南アジアも熱心な仏教国が多いわけですが、ご活動を通じて現地の僧侶の方々との交流もおありになったと思います。僧侶の生活や仏教に生きる姿勢について印象深かったことなどございますか。

三部　カンボジアでもタイでもそうですが、上座部の和尚さんたちは朝の托鉢で食事を得ているわけです。以前、本当に貧しい小さな村に、一緒に托鉢をさせていただいたことが何度かありました。私が感じたのは、こんなにも貧しい村の方にご飯をいただくということは非常に申し訳ないと。正直、心苦しい思いを抱きながら、ついていきました。その村の人たちは、その日の朝炊いたご飯の一番上のところをお坊さんにお渡ししてから、その下のご飯を自分たちが食べるのです。その行いをとても大事にされていて、托鉢ができるということが自分の喜びなんだと思っているようでした。

ご飯をいただいた時、お坊さんはお礼を言ってはいけないのです。合掌もしてはいけない、頭を下げてはいけないというふうに言われました。その意味が、これは仏法僧というふうに、仏様にお供えさせていただいているのであって、喜捨の気持ちをいただいて、お預かりしたのだから、私（僧侶）個人がもらったわけではないのだと。実はお礼を言ってしまう方が楽になるという体験をさせてもらいました。実際はお礼も言わないで、ぷいっと横を向いて歩いていくときのその重みが、どっと自分に掛かってくるのです。仏様へのお供物をお預かりする資格が私にあるのかという、そこが問われている思いでした。カンボジアの難民キャンプに私たちが行ったときに、カンボジアのお坊さんが来られて、キャンプの中で朝の托鉢をされていたんですよ。

有馬　キャンプの中で？

三部　そうです。キャンプの中で。それを見た日本から行った仏教団体の人たちが、難民の人たちは週に二回の配給で食べて生きてるわけですから、そこからお坊さんに托鉢のお布施をしなきゃならないというのは大変じゃないかと。お坊さんがそうじゃないと生きていけないというならば、お坊さんの食事ぐらいは、われわれ日本から支援しましょうというようなことを、寺委員会の総代の方に申し上げたんですよ。日本に帰ったらお坊さんの食事を支援しましょうと。

そうしたら、その総代さんが、大変ありがたい申し入れですけど、お断りしますとおっしゃいました。われわれは仏教徒として托鉢をしたいのだと。今まで托鉢がしたくてもできなくて、ようやくお坊さんが来てくれて托鉢をする喜びを今感じているのだから、この喜びを奪わないでくださいと言われて、非常にショックを受けた体験がありました。ですから、人に施すことができる、仏様に施すことができる喜びということが托鉢の意味なんだなと学ばせてもらったんですね。

有馬　素晴らしいお話ですね。

三部　托鉢は、施す側の喜びなんだというふうなところを私たちがどう伝えていくかだと思います。伝えると言っても、相当長い時間を積み重ねて築かれてきた文化ですから、今、日本の中でそのことを伝えていくのは少々難しいとも思いますが、でも、そこなんだと思うのです、必要なのは。

石澤　カンボジアの人たちは所得や収入からすると、日本人の五〇分の一とか、大変貧しいわけです。それなのに、なぜとても元気なのかと大変疑問に思いまして、大学院の学生さんに調査をさせました。そうしましたら、多くの農民の方は、富裕者になるのが幸福なのではなくて、お坊さんやお寺にこころを通わせ、読経をたしなむことによって、つまり信仰を持つことで自分自身が元気になるんだということでした。信仰にはお金でははかれない価値があるということです。だから、カンボジアの人たちは富裕に関係なく元気なんだという結論に達したんですね。

ですから、決してたくさんのお金を持った人が偉いのではなくて、やっぱり一番偉いのは出家したお坊さんです。お坊さんは悟りの世界を目指して修行されているのです。

藤木　コロナ禍での活動ということもありますが、なんといってもこれから次の世代に向けてもしっかり礎を築かなければいけません。私は、仏教を通じての人間像というものがあると思います。これを築くことができるか。そのためにメッセージを示していけるか。どの宗派であっても、つまりはオール仏教の立場であるはずなのに、そこのところが仏教の中で希薄な感じがするのです。

三部　カンボジアの名僧、マハ・ゴサナンダ師は、「お坊さんはお寺に属してるんじゃない」とおっしゃいました。「社会の苦しみの中に属しているのであって、そこにお寺を建てなさい」と。つまり、人々の苦しみの中にお寺があるのだということをおっしゃっているので、それは非常に示唆のある、今の私たちに示される教えだと思っています。またそういう考え方が礎になって有馬実成師がSVAを創設されたことと思います。ので、それを何とか広めていきたいと強く思っています。

藤木　今回のお話では、現代に生きる私たち日本の僧侶が、原点に返って問い直さなければいけない大切な示唆も頂くことができました。皆さま本当にありがとうございました。

非難より矛盾正す契機に

1952年生まれ。法政大総長。江戸の生活文化や文学、アジア比較文化が専門。著書に「江戸百夢」など。

田中優子（たなかゆうこ）さん　江戸文化研究者

「おまえ、男だ」「男だろ」という発言を聞いて、まず私が感じたのは、「え？こんな言葉で今の青年はがんばれるの？」という疑問です。女だから分からないのかと思い、周囲の男性に聞いたら、こう言われたんです。「あれは男女の意味じゃない。『立派ですぐれた人間』という意味だ」と。

江戸時代には、男性にも女性にも「立派な人物像」を示す明確な理想像がありました。男性なら「聖人」「君子」です。自分を律することができて、責任感があり、思いやりがある。女性には教養や美意識を兼ね備えた「淑女」です。男女で異なりはしても、どちらも学問を通して達成できる理想像でした。

スポーツの世界にも、選手を育てるための「立派な人物像」があるのでしょう。この場合の「男」は男女の性差というより、「責任感のある立派な人間であれ」という意味で受け取った方がいい。そういう人間を示す「男」という言葉で、選手のスイッチが入る。私はそう理解しました。

若い世代は、どんな人間になりたいか、悩みながら生きているものです。だから大学は、それぞれ「こういう人間たれ」という目指すべき像を提示しています。スポーツに限らず、「理想の人間像」は必要だと思っています。

その一方で、「男」という言葉とひもづけて理想の人物像を表すことは、これからはできなくなるだろうし、なくなってほしいとも思います。その意味で今回、あの発言に多くの人の心がざわついたのは、大切なことです。

「男だろ!!」といった発言は以前からあったのに、なぜ今回話題になったのでしょう。私は、ふだんの生活で多くの人が違和感を抱えるようになったからだと考えます。私たちは「性差による区別なんてもう意味がない」と思い始めている。一方で、最近の医学部入試差別や男女による雇用形態の差を見るにつけ、「実際は乗り越えてはいなかったのではないか」と気づかされています。「やはり能力の問題以前に、男性優位の社会だったのだ」と。そういう矛盾を感じているからこそ、抱いた違和感を、言葉に出せたのではないでしょうか。

私は「女性初」の東京六大学の総長と言われています。事実ですし、見回せば珍しいことも確かなのですが、自分ではずっと、意味のない言葉だと思ってきました。ただ珍しがるのではなく、珍しくない状態にするために、どうすればいいのかを考えることが大事なのではないか、と。だから、あの発言を非難してはいけない。私はそう思っています。「炎上」や「分断」を生むだけで終わってほしくありません。社会がいい方向に向かうためのきっかけになるといいですね。

（聞き手・田中聡子）

スポーツが映す世の潮目

1953年、米オレゴン州生まれ。専門はスポーツ社会学。共著に「Japanese Sports: A History」。＝Zoom画面から

リー・トンプソン（Lee Thompson）さん　早稲田大学教授

スポーツは、もともと男のものとされてきました。近代オリンピックが始まっても、それは変わりませんでした。

アメリカでも、男性選手が負けて「それでも男か」のようにいわれることがあります。スポーツで勝つのは「男を上げる」ことなのです。女子マラソンの勝者に「お前、女だ」とはいいません。

スポーツは「筋書きのないドラマ」といわれるように、私たちはそこに「物語」を求めます。多くの場合、スポーツの「男らしさ」は身体的な強さや、相手を制圧する力としてとらえられます。なので「最終区で逆転したから立派な男だ」という物語に感激する人がいる。勝ったから物語になるので、2位のままなら「男だろ」もたいして話題にならなかったと思います。

一方で、最後に逆転するかどうかに、男か女かは関係ないはずです。「立派なのは、なぜ男なのか」と疑問を持つ人もいます。「お前、男だ」が話題になったのは、「男だから」「女だから」といった色眼鏡で見られることに違和感を持つ人が多くなった表れでもあり、当然のことです。

スポーツなのだから目くじらを立てることはない、という人もいるかもしれませんが、私はちがうと思います。スポーツこそ、社会や政治、経済の潮目が変わる最前線になり得る。それだけのメッセージを持つからです。

米大リーグで1947年、初の黒人選手としてデビューしたジャッキー・ロビンソンは、黒人がプロスポーツで活躍する風穴を開けました。もちろん差別が解消されたわけではないけれど、ひとつの切り口になりました。

日本でも近年、テニスの大坂なおみや、米プロバスケットボールNBAで活躍する八村塁が人気を集めています。2人は両親とも日本出身というわけではないけれど、そうした選手をごく当たり前に応援する人は多い。だれにとっても生きやすい、開かれた社会に近づけるという意味で、2人に対するこれからの報道に注目したいと思います。

同じ試合を見ても、感じる物語はそれぞれちがいます。今年の箱根駅伝で、私は復路でじりじり順位を上げて6位に食い込んだ早大に注目し、「男だろ」の発言には気がつきませんでした。

駅伝は「たすきをつなぐ」といわれるように、全員の協力が求められるスポーツです。苦しさに耐え、補い合って、責任をまっとうする競技は、必ずしも「男らしさ」が際立つとはいえません。むしろ「女性らしさ」と結びつけることも可能でしょう。

スポーツが映す価値観は、時代や社会によって変わります。これから競技を始める小学生の目にどう映るか。メッセージを発するメディアの側は、意識した方がいいと思います。

（聞き手・岸善樹）

2021年1月20日（火）

「許容範囲」集まれば偏見

1967年生まれ。日本語学者。「三省堂国語辞典」編纂（へんさん）者。著書に「知っておくと役立つ街の変な日本語」など。

飯間浩明（いいまひろあき）さん　国語辞典編纂者

箱根駅伝での監督の「おまえ、男だ」が話題になりました。少し前には「お母さん食堂」というコンビニのブランド名をめぐるやりとりがありました。SNS上では、男や女、父や母といった表現をめぐる議論がよく起こります。

「男一匹」「女心」など「男女」のつく言葉の多くは、男はこういうもの、女はこういうもの、という固定観念が染みついています。現在、私たちが使う「男○○」「女○○」といった表現で、伝統的な性別のイメージがつきまとわない例というのは、なかなか思いつきません。

例えば「男前」という言葉があります。2000年代から「きっぷがいい」の意味で女性にも使われ、「男前の上司がいてね」と聞いただけでは、対象が男女どっちかわかりません。でも、これも結局、「まるで男のような性質だ」と、男性の固定的イメージに基づいて表現した言葉です。単に「きっぷがいい」と言うのとはやはり違います。

言葉には、ほんやりしたものをステレオタイプ（典型）化する働きがあります。大事な働きですが、レッテル貼りにもつながります。1960年に刊行された初版の三省堂国語辞典をひくと、「男」は「力が強く、主として外で働く人」、「女」は「やさしくて、子供を生みそだてる人」。当時の社会通念上の男女の典型で説明しています。これだと腕力のない私は男ではなくなる。現在では、男女の固定的なイメージを辞書の中に設定することは不適切でしょう。

「おまえ、男だ」も「お母さん食堂」も、男女の固定的なイメージを反映しています。視聴者が多い全国放送のテレビ中継で流れたり、公共性の強い企業のブランド名で使われたりした場合、不快に思われる可能性があることは考えたほうがよかった。

一つ一つの言葉自体が決定的に問題だとまでは思わないんです。私は香川県出身ですが、県内では「香川県人、最高！」と言う。自分たちを励ます表現です。男子チームのミーティングで「男ならできる、頑張ろう」と言っても悪くはない。女子チームだって「女ならできる！」と言うでしょう。ただ、外側の社会全体を見ると、根強い男女格差が存在する。外部の人がいる場所で「男ならできる」と言うと誤解を生みます。

許容範囲と思われる表現でも、大勢の人が社会のさまざまな場所で日常的に使っていけば、経済学で言う「合成の誤謬（ごびゅう）」のような結果になります。つまり、一つ一つの表現は許容範囲でも、それが集まると、全体としては性的な役割の固定化に貢献し、許容できないような偏見に結びついてしまう。だから、よりよい言い方はないか、ひとりひとりが常に考えることが大事だと思っています。

（聞き手・中島鉄郎）

朝日新聞の「論考」より転載

編集後記

藤木隆宣

駒大が昨年十一月の全日本大学駅伝に続いて今年の箱根駅伝でも見事な逆転優勝を成し遂げました。マラソン強化戦略プロジェクトリーダの瀬古利彦氏が駅伝で三分以上差がつけられていると逆転は非常に難しいと話していましたが、その言葉をその場で覆す逆転劇でした。私も信じられないような光景をこの目に焼き付けることができて全日本駅伝以上の感激を味わいました。その後、大八木監督の檄がSNS上で大きな問題になり、私は全く気にならなかったのですがその反響の大きさからか、識者による見解を朝日新聞が大きくとりあげたので本紙7面に転載させていただいたのと、私の友人にも意見を求めたので一部をご紹介いたします。

＊不特定多数に向けて発せられた言葉でも無く、同じ目的で集まった仲間内に向けられた、それも叱咤激励する立場の方の言に、関係ない周囲がどうして目くじらを立てる必要があるのか、全く理解出来ません。近頃、関係ない第三者が自分の善意や正義感を、あまりに安易に他人に押し付けることが多くなったような気がします。高所作業をしている作業員が安全帯の着用を忘れていたので「こらぁ、死にたいのかぁ！」と現場監督が咎めたら、通行人が「こんな汚い言葉で作業員を恫喝している」とSNSに動画を投稿、大炎上、みたいな愚かさを感じます。発信するなとは言いません。音楽も、文学も、芸術も、全ては自分の正義の表現の一つの形ですから。ただただ、押し付けはご免です。

＊どこにでもある体育系の掛け声でしょうから、なんてことないでしょう。

アメリカの映画を見ていたら、上流階級の女性だって、悪態はこんな生易しい言葉ではありません。日本では言葉の魔女狩りここに極まれり、ばかりです。古典落語を聴いていたら、悪態や悪口が、文化であり、一種の教養だということがわかります。

コロナ禍は世界の動向を左右する事態になっています。お寺も当然その動きに巻き込まれているのですが、お寺への影響はコロナ禍が契機となってのお寺離れです。お寺離れは世代交代が進むにつれてさらに進むことでしょう。先祖や親兄弟との絆がどんどん薄くなっていくことから生まれてくる仏事への関心の薄さです。徳川幕府が住民を管理する狙いから生まれた檀家制度はお寺にとりましては誠にピッタリの制度でしたが、いよいよこの制度に頼れなくなってきました。が一方では現代の落ちつかない時代に心のよりどころとしての仏教が求められています。とっかかりが仏事から心のよりどころとしてのお寺になってくると私たち僧侶は思っていましたが、世間はそうではなくて仏事依頼所だったのです。さてどうしますか。

2021夏・お盆号特集予告
2021年5月30日　発刊予定

曹洞禅グラフ

駒澤大学総長　群馬県良珊寺住職
永井政之老師インタビュー

インタビュアー｜柳澤 円（まどか）

いまだからこそ伝えたいお盆のこころ

仏教企画発行の刊行物

（★部数により割引があります）　すべて税別価格です

『修証義』解説　丸山劫外著	1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』　長田暁二・西舘好子共著	1,200円★
『まんが問答一期一話』　文 平和宏昭　まんが 垣内敬遠	1,200円★
『葬送のしおり』　長井龍道著	30円
修証義読本『生老病死』　須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒経典』　須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』　霊元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』　霊元丈法著	150円★
随想集　玉崎千鶴子　その永遠の世界を探って	500円

＊『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。（消費税、送料別）

曹洞禅グラフ

発行日	
春 彼岸号	2月10日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月20日
冬 正月号	10月30日

1部 200円	
9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

お申込み
仏教企画
〒252-0116　神奈川県相模原市緑区城山4-2-5　※住所・FAX番号がかわりました
TEL: 042-703-8641　FAX: 042-782-5117　Email: fujiki@water.ocn.ne.jp
※ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは　①ご寺院名　②お客様番号　③電話番号でも可能です。

手まり学園

寄附者御芳名
R2.11.1～R3.1.26

所在地	寺院名（個人名）	金額
神奈川県	青木義次（88）	9,000
宮城県	光厳寺	10,000
東京都	正覚寺	10,000
千葉県	観音寺	10,000
宮城県	通大寺	10,000
長崎県	南明寺	10,000
佐賀県	高傳寺	5,000
栃木県	満福寺	10,000
東京都	砂金智佐（110）	3,000
山口県	興元寺	10,000
三重県	地蔵院	10,000
愛知県	東昌寺	10,000
千葉県	宗胤寺	10,000
大分県	松樹英子	5,000
兵庫県	永澤寺	10,000
秋田県	円通寺	10,000
栃木県	東陽院	5,000
埼玉県	曹源寺	20,000
秋田県	歓喜寺	10,000
神奈川県	青木義次（89）	9,000
茨城県	龍泉院	10,000
熊本県	地蔵院	10,000
宮城県	皆伝寺	10,000
静岡県	宿蘆寺	30,000
福島県	安洞院	10,000
静岡県	可睡斎	20,000
埼玉県	大原朋子	10,000
静岡県	龍雲寺	10,000
東京都	宮崎正己	1,000
静岡県	大雲院	3,000
山口県	久屋寺	10,000
福島県	円通寺	10,000
和歌山県	法輪寺	5,000
埼玉県	丸山劫外	20,000
東京都	天寧寺	20,000
鳥取県	林泉寺	10,000
秋田県	満福寺	10,000
静岡県	鈴木包一	10,000
神奈川県	青木義次（90）	10,000
岩手県	千手寺	2,000
東京都	全龍寺	100,000
東京都	太田美和	30,000
三重県	光明寺	10,000
東京都	小川匡夫	50,000
合　計		597,000

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。

お正月に禅語かるたを楽しみました
（相模原市緑区　日庭寺にて）